

この復活劇を誰が予想したであろうか——。第73代横綱「照ノ富士」。18歳で大相撲の世界へ飛び込むと、すぐに頭角を現し、23歳で大関昇進。周囲の期待が高まるなか、ケガと病気に見舞われ、2017年、大関から陥落。不調はその後も続き、翌18年には幕下・序二段に——。もはや引退かとささやかれたが、そこから奇跡の大躍進が始まった。

相撲のおかげで、いまの自分がある。  
それが自分のすべてです

特集

# STEP BY STEP

## 照ノ富士

Terunofuji  
大相撲・横綱





## 幕下陥落からの 奇跡の復活劇

——優勝おめでとうございます。横綱として初めて臨んだ場所での優勝は、これまでとは違うものでしょうか。

気持ちのうえで、そんなに違いはありませんでした。というのも、土俵に上がったなら、準備したことしか結果に出ませんから。勝てば「いい準備ができた」、勝てなければ「準備が足りなかった」というだけのことです。一場所、一場所、その一日が勝負ですから、「横綱として初めての場所」といった特別な意識はありませんでした。

——二十三歳で大関に昇進するも、ケガや病気で序二段まで陥落。そこから復活しての横綱昇進は、相撲ファンならずとも拍手を送った方も多いと思います。いま振り返って、序二段に落ちたときは、どんな心境でしたか。

正直、幕下に下がってまでやるのか、という気持ちはありました。それまで、元大関で幕下に落ちるまで相撲を続けた人は一人もいませんから。

部屋の人や後援会の人たちが「自分が気にするほど周りは気にしていないよ。あまり深刻になるな」と言ってくださったことは、すごく励みになりました。けれども自分としては、やっぱり続けるのはつらかった。早く辞めたいという気持ちしかなかったですね。

伊勢ヶ濱親方いせがはまには「辞めさせてください」と何度も伝えました。しかし、その都度、「辞めるにしても辞めないにしても、まずは病気を治しなさい。おまえは実力があるんだから、もう一回、復活した姿を見せてほしい」と励まされました。そこからなんとか努力して病気も良くなり、ケガも回復に向かっていきました。こうして横綱になったのは、ひとえに親方のおかげです。

——復活に向けて、心がけたことはありますか。

以前、ある方から「君の将来の夢はなんですか？」と聞かれたことがあります。「横綱になるために日本に来ました」と答えると、「だったら、一日二十四時間のなかで、その夢に向かって一生懸命にやっている時間は何時間

ですか」と言われたんです。そのときは、さして気にも留めませんでした。幕下まで落ちて、もう一回頑張ってみようという気持ちになったときに、その言葉を思い出したんですよ。そして「よし、一日のうち二十四時間、相撲に取り組もう。全部賭けてみよう」と思ったんです。

たとえば、朝は朝稽古のために起床時間を決める。稽古は惰性でこなすことのないよう、しっかり目的を持ってやる。筋力トレーニングも自分の悪い所の修正、弱い所の強化など、必要なことを明確にして筋肉をつくっていく。夜も同様に、きちんと目的を持ったトレーニングメニューをこなしていく。そうやって毎日繰り返していると、だんだん癖になってきて、相撲がどんな好きになっていきました。

そんな毎日自分との闘いでもあるので、身体からだの鍛錬だけでなく、心も鍛えられたように思います。そのうち、寝ているときにも相撲のことが夢に出てくるようになりました。

——そうした毎日の時間の使い方が、



土俵に上がったら、  
準備したことしか結果に出ませんから。  
勝てば「いい準備ができた」、  
勝てなければ「準備が足りなかった」  
というだけのことです。





一番一番の取組の結果に表れるということですね。

そうですね。心と身体でいえば、これまででは身体を鍛えることばかり意識して、心の鍛錬が追いついていなかったように思います。いまはこうして結果が出せたので、皆さんに復活劇と言っていたのですが、結果が出ていなかったら、大関になったこと自体が何だったんだ、という話になっていたかもしれません。

幕下に落ちたときは、「なんでこうなっちゃうんだ」と、自分を責めてばかりいました。気持ちが悪い方向に向いていたように思います。

大関から序二段に下がったことは、一見、マイナスに思えるかもしれませんが、しかし振り返ってみると、プラスになったことのほうが多いように思います。いまは、どんなことでもプラスに捉えられるよう、いつも心がけています。

——お話を伺っていて、さまざまな苦難を通して精神的な強さを身につけられたように感じます。

最近よく、「昔の自分と今の自分を比べて何が違いますか？」と聞かれるんですが、自分では変わっていないように思います。昔も今も同じように稽古はしていますから。ただ、昔のほうが自分に自信があったように思います。いまは自信がないですね。これで終わってしまうかもしれないという思いのなかで毎日やっています。あのときの自信を取り戻したいと思って稽古をしています。

ですから、自分が成長しているかどうかは分からないですね。

——一般に、挫折すると、なかなか前向きになれないものだと思います。もし挫折を味わって悩んでいる方にアドバイスをするとしたら、どんなことがありますか。

自分は相撲しかやったことがありません。世間に出たことはありません。アルバイトをしたこともありません。そんな二十九歳の自分が、世間の方にアドバイスなどできません。

自分はただひたすら、一日一日、現実の自分をしっかり受け止めて、二十

四時間のなかでできることを精いっぱいやる。その生活を、ずっと送ってきただけです。

### 数学で身を立てるつもりだった

——日本の相撲界に入ったきっかけは？

もともと自分はモンゴルで相撲をしていたわけではないんです。将来は数学の世界へ進みたいと思っていました。数学オリンピックというものがあるんですが、高校生のとき、モンゴルで一位になったことがあります。両親が数学会のある会社を経営していました、いずれは同じ仕事をするつもりでした。

そんな自分が日本で相撲をすることになったのは、一つにはモンゴルで相撲がブームだったこと。それに、父が相撲好きだったことも影響しています。十六歳のとき、白鵬はくほうのお父さんがモンゴル相撲の大会に連れていってくださったんです。そして「相撲をやってみないか？」と声をかけてくれました



第63代横綱旭富士・伊勢ヶ濱親方の「還暦土俵入り」の際には、親方の土俵入りに先立って、普段の練習風景が披露された（東京・両国国技館）

た。その後、日本へ見学に来て、自分もやってみたいと思うようになりました。白鵬関のお父さんは鳥取城北高校と縁があったので、高校三年生のときに留学しました。それからは、プロになるという気持ちでいました。

——高校生で日本に来てから、慣れない環境での相撲の稽古や日常生活はいかがでしたか。

鳥取城北高校は相撲の名門ですし、稽古が厳しいことでも有名でした。一緒にモンゴルから来た仲間で、途中で辞めた子もいました。厳しい、つらい、早く帰りたい、と言っていた子もいましたが、自分は厳しいことは承知のうえで、最初から覚悟していました。

母はそうした状況を周囲から聞いていたらしく、いまになって「おまえはひと言も弱音を吐かなかつたけれど、それはどうして？」と仰うんです。自分としては、厳しいことは最初から分かって日本に来たのだから、それを言ったところで何も変わることはない、という感じでしたね。



10月初旬には、第63代横綱旭富士・伊勢ヶ濱親方の「還暦土俵入り」が行われた。太刀持ちと露払いは、弟子である元横綱日馬富士のダワーニヤム・ジャンバドルジ氏と元関脇安美錦の安治川親方が務めた。写真は土俵入り前のトークショー。左が照ノ富士関（東京・両国国技館）



## 柔道金メダリスト・大野選手から学んだこと

——ところで、柔道の**大野将平**選手と親交があるそうですね。

はい。大野選手が当時横綱だった日馬富士関の稽古の見学に、部屋へ来たことがあって、そのとき初めて会いました。自分もモンゴルで一年間、柔道をやっていたこともあり、意気投合したという感じですね。同い年ということもあって、一緒に筋トレに行くこともあります。

また、幕下に落ちていたときに、大野選手が練習する天理大学の道場へ行って、膝の動きを試すために柔道着を着てトレーニングさせてもらったりもしました。お互い本音で話せる友達として、お付き合いさせてもらっています。

——相撲と柔道は勝負の世界という面で厳しさには変わりがないと思いますが、そういう意味では、お互いに影響し合うことも多いのではないですか。

そうですね、ものすごく影響を受け



相撲をやりたいという子供たちが目標とする力士のなかに、自分の名前が挙げられたら、ありがたいことです。

ています。たとえば、大野選手は圧倒的な力で優勝してきましたが、みんなが見ているなかで、とてつもない大きな期待に応えるというのはいすごいなと思います。堂々とした彼の佇まいたたまいから、日本人が心の奥に持つ武士道精神というものが伝わってきます。それが格好いいですね。自分も近づけるように、という気持ちがあります。

——大野選手からは強烈な気迫を感じるので、東京五輪で金メダルを取った後のインタビューで、決勝、準決勝とも怖かったと答えていましたね。その「怖かった」というコメントが意外に思いました。

自分は少し分かるような気がします。といっても、自分は横綱になったばかりなので、オリンピックを連覇した大野さんの気持ちすべて分かるはずはありませんが。自分はこれまで、ただ

強くなりたい、強くなきゃいけないという思いだけで稽古に励んできました。どんな心持ちで立ち合いに臨むかというようなことは、考えずにやってきました。だけど今は少しずつでも大野さんのように勝負に絶対に勝つという姿勢を持って、そのために一日二十四時間、自分のすべてを相撲に打ち込んで、一番一番、全力を出しきれないようにしたいと思っています。そういうことも、大野さんの姿から教えてもらったような気がします。

### すべては土俵の上で 一生懸命やること

——横綱昇進のときの口上で「不動心を心がけ、横綱の品格、力量の向上に努めます」と述べられました。あらためて、この言葉に込めた思いをお聞かせください。

「強くなりたい」「親や親方、周りの人たちへ恩返ししたい」との思いで、必死に稽古をしてきました。これからもその気持ちを変わずに持ち続け、一日一日を必死に、大事に積み重ねていきたいと思っています。

親方と女将おなみさんからは「すべては土俵の上で一生懸命やること」と、常々聞かせていただいています。そのことを忘れずに、これからも頑張りたいと思います。

### これから目指すものは？

自分はこうして、親方や女将さんに育てていただいて、みんなと稽古をしてきたおかげで、相撲は強くなったかもしれない。でも、偉くなったわけじゃない。そう思うんです。

ただただ肉体と精神を鍛えて、相撲で活躍できる人間になりたいと思って、今日までやってきました。

自分は、丁髷ちんまげを落とせば普通の人です。社会のことは何も分かりません。相撲しかできない。そういうことは忘れてはいけないと思っています。

相撲のおかげで、いまの自分がある。

# STEP BY STEP



【てるのふじ・はるお】

1991年、モンゴル・ウランバートル生まれ。17歳になるまでスポーツとは無縁だったが、元横綱・白鵬の父・ジグジドゥ・ムンフバト氏に素質を見いだされ、2009年、鳥取城北高校に編入。翌10年、間垣部屋に入門。13年、間垣部屋の閉鎖に伴い、伊勢ヶ濱部屋に移籍。素質が開花して好成績を残し、15年3月場所には小結を通り越して、関脇に昇進。その後、わずか2場所で大関昇進を果たした。その後、ケガと病気に見舞われ、17年に大関から陥落。19年には幕下・序二段まで落ちた。しかし、そこから奇跡の復活を遂げ、21年3月場所で、2度目の大関昇進。7月場所で横綱昇進を果たした。

それが自分のすべてなんだと思います。お相撲さんは、そうじゃなきゃいけないと自分は思っています。

——これから若い力士たちが照ノ富士さんに憧れ、目標にして、相撲の世界に入ってくると思います。そうした若い力士たちに何か思うことはありますか。

子供たちや若い人たちには、もっと相撲を見てほしいです。それで相撲界が盛り上がって、相撲をやりたいという子が出てくればいいなと思います。一人でも二人でも、その子たちが目標とする力士のなかに、自分の名前が挙げられたら、ありがたいことです。

——ありがとうございます。

7/6